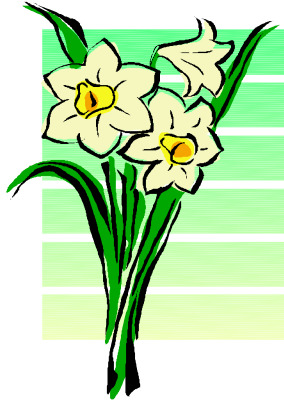


## 水仙



BSテレビを見ていると、時折「BS花」こよみ・フラワーデイズ」という、素敵な花のある生活を紹介する短い番組が流れて来ることがある。茶室や床の間などに洒落たさりげない活け方をしてあったり、西洋風なアレンジメントで斬新な美しさを強調していたり、何の変哲もない器を見事な花器に変身させたりと「見る者をつつとりさせてくれる。しかし色彩溢れる花々がふんだんに活けられているのには、何となく身近な感じがしない。手近に手に入ることもない花もあるが、それよりも貧乏性の私は、それらの花が一本何百円もするだろうと考えるだけで何か遠い世界だと思ってしまう。

鹿儿島に住むようになって、花々に囲まれていたいという願望が叶えられると思って、花の咲く樹木をあれこれ植えた。秋には球根を埋め、春には種を蒔いたお墓の花も買わずに済むようにと菊の苗もあれこれ植えた。惜しげもなく切り取る警沢さを夢見て。しかし殆どは手入れが下手なのか悪いのか満足の行くようにには育たなかった。

それでも芽を出し育って、いざ花が咲いてみると、私は一本も切りたくないのである。花にとっては切られて部屋を飾ることが本望なのだろうと思っのだが、一方何もむざむざしおらせることもない、庭で眺めていようと考えてしまふ。「やはり野におけ」という感じである。

六年前の夏、家の改築に合わせて造園して植木も大幅に植え替えた。その年は雨の少ない暑い秋だった。古い木々がちゃんと根付くか心配だったし、樹木の下に敷きつめられた苔も枯れる恐れがあって、毎日の水やりが大変だった。やがて冬が来て木の葉も散り雑草も姿を消した頃、庭のあちこちから水仙の芽が出て来

た。これは造園師が植えたのではなく、以前の庭の球根が残っていたものらしかった。そのためか思いもかけぬ処にも顔を出して来て、その生命力に驚いたものだった。そして正月前には鳥の子色の花びらにの真ん中にボチンと黄色の芯を付けた小さな花を咲かせた。その花とそれを包むパステル調のモスグリーンの葉は山茶花の散り敷いた紅とともに冬の庭の枯れ葉色の地面に素朴な彩りを添えていた。

しかしその花の茎はひ弱で、頭の可憐な花さえ重過ぎるのか、風のためなのか殆どが折れておじぎをしていた。丁度句会の兼題が水仙だった。

水仙の折れたるばかり三本  
井戸の辺に水仙集いて風柔し

今年の正月は姑の喪中で、暮れに正月用品の買い物にも出かけなかった。花も買わなかったので代わりに庭の千両と水仙を初めて切ることにした。花鋏を手に庭に降り立つ。今まで全然実をつけたことのない千両が、今年は枝毎に赤い実を着けている。何か因縁めいた気分で五六本切ると、足元の水仙を見渡した。可愛

い花が三本ずつ肩を寄せ合ってあちこちに咲いている。切り取って顔を近づけると控えめながら甘い香りが出た。

夫と二人だけで迎える初めての正月である仏壇に水仙を供え、部屋ごとに千両と水仙を飾った。掃き清められたどの部屋にもかすかな花の香りが清々しい。ガランとした姑の部屋も、薩摩焼の一輪挿しに千両と水仙が処を得て春を待つ風情で収まっている。障子越しの日差しもほんのりと温かい。ふと今年はやい年になりそうな予感がした。

